

平成 28 年度 ふるさとものづくり支援事業

市町村名	埼玉県秩父市	
事業名	多面的な雇用の創出と人材育成のためのキハダ（黄檗）を活用した化粧品の開発	
企業等概要	企業等の名称	秩父樹液生産協同組合
	代表者氏名	代表理事 山中 敬久
	所在地	埼玉県秩父市大滝 1805 番 1
	連絡先	0494-55-0122
	URL	http://acermono.com/

平成 30 年 2 月現在

【事業者概要】

地域のカエデ樹液の活用により、林業の再生と森林の保全を図っていくことを目的に平成 24 年に設立された林業及び関連事業者による組合。カエデからのメープルシロップ開発に続き、キハダ（黄檗）からの製品づくりに取り組んでいる。

【事業概要】

◇背景・経緯

かつて絹織物やセメント産業で栄え、現在はユネスコ無形文化遺産に登録された秩父夜祭などにより観光地となっている秩父市。その最西端に位置する大滝地区は 97% が森林で、材木は新国立競技場の建築資材としても使用されている。

輸入木材により価格が下落し用材林（杉、ヒノキ）の荒廃が懸念されるため、新たな森林資源の活用とその管理を進めている。自生するキハダの有効利用を図りたいものの、生薬の原料として売っただけでは利益が限定的なこと、また組合が企画する、樹液を活用した商品シリーズ、「ちちぶりのめぐみ」で利用できる、カエデに次ぐ樹種を求めていたことなどから、強い抗菌作用をもつキハダの樹皮を用いた商品開発の取組を行ってきた。

《キハダの木と内部》



キハダ（黄檗）とはミカン科の落葉樹で日本中に分布する。抗菌性・抗生作用から、内側が鮮やかな黄色の樹皮を乾燥させたものは、古くから胃腸薬などとして使用されてきた。



これまでに、苦みのあるキハダに同じミカン科で相性の良いカボスの果汁を加えてすっきりした味わいに仕立てたサイダーを開発し、既に道の駅等で販売され、売り上げは堅調に推移している（平成 26 年度新技術・地域資源開発補助事業）。組合では商品ラインナップを増やすことで幅広い展開を目指しており、キハダの殺菌力に注目したボディソープの研究を重ねていた。

《平成 26 年度開発商品》

◇研究開発の概要

日本薬科大学および製薬会社の協力を得て、キハダの効能による医薬部外品の承認を申請。キハダエキスを配合したボディソープは複数存在するが、「薬用」と効能を謳った商品は見当たらないため、キハダの効能を理解しやすく、かつ秩父の森をイメージしたサイダーと統一した商品パッケージを意図した。

ただし薬用の効能を謳うには薬事法に従った表示が求められるため、パッケージの成分表示欄および販促ツールは監督当局からの細かな指示に対し、慎重な対応を要するものであった。

またサンプル品の試供を行いアンケートにより、マーケット調査とデザインや香りや使用感に対する意見を収集。価格設定 2,500～3,000 円、試作したデザインも好評という結果を得た。

【成果】

◇地域性・特徴

アンケート調査を活かし、秩父の森をイメージできる一連の商品と統一した巻き台紙型のパッケージを採用した。

また当局との度重なるやり取りにより医薬部外品の承認を取得。「薬用」と肌の潤いを保つ保湿性の効能を訴求しつつ、有効成分の殺菌・消毒作用により体臭や汗臭、加齢臭、ニキビを軽減できる特長を強くアピールした表示をパッケージや販促ツールに記載できることとなった。

商品はぬめり成分が強いため泡立ちがやや少なめの、キハダと同じミカン科のユズの優しい香りに仕上げた。

平成 29 年 2 月の完成品発表会は多くのメディアに取り上げられ、市役所や組合に問い合わせが相次ぐほどの関心の高さであった。



ボディソープ

サイダー



◇商品化・販売先

商品名「薬用きはだのボディソープ」として、自己資金も投入し約 3,000 本完成。アンケート結果を踏まえ、300ml で 2,780 円（税込み）のやや高めの価格設定としたため、当初計画のドラッグストアの店頭販売に代えて、物産館「源流郷おおたき」やインターネットで販売している。

《開発された新商品》

【今後の展望】

「柿渋」などと比較すると、キハダの保湿、抗菌・消臭の効能は認知度が低いことから、多くの人にキハダの持つ特長や商品の良さを実感してもらえるよう、シャンプー等と組み合わせた少量タイプを開発することを検討している。

また、「ちちぶもりのめぐみ」のラインナップを充実させ、秩父の木の伐採と植林という循環を進めていくことで山の豊かさを伝え、多面的な雇用の創出と人材育成につなげていきたいと考えている。